
・ 訪問看護ステーションの震災後の活動／南三陸町100日間の活動

(門間やす子、高橋晶子：ナース発 東日本大震災大震災レポート、2011、p.159-168)

2017年6月2日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

二つの文献『統括部門と訪問看護ステーションの震災後の活動』門間やす子（宮城県看護協会訪問看護ステーション室副室長）・千葉孝子（宮城県看護協会桃生訪問看護ステーション看護係長）、『南三陸町 100 日間の記録町民に寄り添いながら』高橋昌子（宮城県南三陸町地域包括センター）について述べる。

『統括部門と訪問看護ステーションの震災後の活動』では、東日本大震災発生後の宮城県内における訪問看護師の活動について述べている。門間やす子氏は、訪問看護ステーションの活動について述べている。訪問看護ステーションの地震発生後の活動は、主に以下の3点である。①宮城県看護協会災害対策本部に参加し、運営に協力した。②宮城県看護協会と宮城県訪問看護ステーション連絡協議会等の訪問看護に関係する団体等との連携および連絡調整を行った。③宮城県看護協会災害対策本部の一員として、看護協会立訪問看護ステーションの被災状況、職員・利用者の安否確認および支援を行った。①の宮城県看護協会災害対策本部は、災害発生後ただちに設置されたが、通信網やライフラインが枯渇していたため実査は活動できていない状況であった。22日に日本看護協会災害対策本部現地事務局が設置され、ここでは災害支援ナースの受け入れや、避難所への連絡調整、送迎などを24時間体制で行った。また、この2つの組織で会議の内容を共有し、ガソリンスタンドの情報の共有などを行った。②では、連絡協議会から、傘下ステーションの被災状況、職員の被災情報や利用者の安否確認情報が提供された。その情報が宮城県内全体の訪問看護ステーション被災状況の把握に役立ち、その後の対応を支える一助となった。③では、ステーションの職員の被災状況を確認し、支援を行った。千葉孝子氏は、訪問看護師が個人として行ったことを述べている。被災後2、3日は道路の冠水などにより担当エリアの利用者の安否確認ができなかった。その後、避難所を巡回し、避難者のバイタルサインチェックや問診をして回った。医師と合流した後は、医師の指示のもと避難所で重症患者などへのケアを行った。

『南三陸町 100 日間の記録町民に寄り添いながら』では、自身も被災して暖も取れない中、看護師として行ったことが述べられている。避難所にいた筆者だが、ほかに医療者がいるのにもかかわらず物資がないために有病者に処置ができないことをもどかしく感じていた。傷を負った人には、優先的に暖かい場所をとらせ、健常者でも疲弊してきた様子が見られたので換気、水分補給、ストレッチ体操、脳刺激ゲームを行った。この活動を行い、現場の空気は和やかになったという。震災5日目にして、医療支援チームの第1陣が到着し、孤立化した地域へも行くことができるようになった。震災9日目には保健師チームが到着した。それも最初は指揮系統がしっかりせず手探りの状態で支援が始まったという。

以上の内容から、災害時は他職種が連帯し、情報の共有を図ることの大切さがわかる。しかし、災害時は物資や活動拠点の確保が難しい。その時に個人ができることをやっておくことの重要であると理解できた。